

健康 ぷらざ

コロナ禍後の子どもの感染症

—なぜ流行するの？なぜ検査してくれないの？—

帝京大学大学院公衆衛生学研究科 教授 /
ナビタスクリニック川崎 小児科 高橋 謙造

企画：
日本医師会

No. 571

さまざまな感染症が同時に流行

今年、小児科外来はどこも混雑しています。さまざまな感染症が同時に流行しているからです。よく耳にする小児の感染症だけでも、RSウイルス(RSV)、ヒトメタニューモウイルス(hMPV)、アデノウイルス(ADV)、ヘルパンギーナ、インフルエンザ、新型コロナなどがあり、それ以外に、パラインフルエンザウイルス、エンテロ/ライノウイルスなども流行しています。さらに溶連菌^{ようれんきん}という細菌感染症も地域によっては流行が見られます。これらの感染症は、コロナ禍以前には特定の時期に集中して流行するのが常であり、比較的容易に診断できました。しかし今は同時流行しているために、その診断が難しくなっています。

なぜ同時流行しているのか

本当の理由は分かりませんが、有力な説の一つとして「免疫負債」があります。これは、コロナ禍で厳密な感染対策が徹底され、ウイルスが遠ざけられた結果、子どもたちが各種のウイルスに対する免疫力を本来獲得する時期に獲得できなかった状態のことをいいます。

検査で原因を 明確にしたいけれど…

さまざまなウイルスや細菌の流行に対して、診療現場で明確に診断する手段はあまり多くありません。溶連菌、新型コロナ、インフルエンザ、RSV、hMPV、ADVなどは迅速診断できる方法がありますが、それ以外の細菌やウイルスにはありません。ヘルパンギーナは咽頭の真っ赤な炎症を確認して診断しますが、原因ウイルスを検査で特定したくても、検査のしようがないのです。

繰り返し感染するのは悪いこと？

特に、保育園や幼稚園に通っているお子さんが、繰り返し発熱して園に行けない状況で苦労していると思います。しかしこれは、毎回発熱することで、一つひとつのウイルスに対して免疫力を獲得しているということです。必ず経験する試練なので、熱が出たら、「また、免疫力が強くなる!」と前向きな気持ちに切り替えて、乗り越えていきましょう。

